

## 読み書き分離の論

学校教育では、明治以来、文字の読み書き学習を同時に並行して進めて来た。然し、読みと書きとは、本来、並行して学習させるべきものではない、と私は考へてゐる。「読みの学習から進めて、その文字についての認識が深まったところで、書きの学習に移る」といふのが、私の考へである。

私は、昭和二十八年以降、十全年間に亙つて「読み書き分離、読み方先習」の教育を実践してみた。その結果を、「読み書き同時並行」の教育と比較してみると、その数分の一の時間の学習で立派に“書く”ことが出来るやうになることが判つたのである。字形の認識がまだ出来ないうちから書かせる今の教育法では、時間ばかりかかり、しかも一向に書けるやうにならない。その事はよく考へてみれば当然の事だと思ふ。

昭和四十四年三月十日の国語審議会で、今は亡き阿部吉雄委員(当時、東大名誉教授、文学博士)が、「幼稚園で、石井方式による漢字を読む教育が行はれてゐるが、漢字は読むことに価値が高い。書くことは後回しにして、先づ読むことから始める教育を考へてみてはどうか」といふ提案をしたところ、「読み書き同時の並行教育は明治以来の鉄則である」といふ反論が出、それについての是非をめぐる激烈な論争があった、と当時の全国紙で一斉に報じたことがあった。

朝日新聞は、これに基いて、四月二十二日、「漢字教育どちらが有効」といふ論争を特集した。「社会で漢字で書いてゐる言葉は、最初から漢字で教へよ。子供には、漢字を読むことはそんなに苦にはならないのだ」といふ石井方式の紹介から始まって、現行の読み書き同時並行論を主張する西尾実委員(元・国立国語研究所所長、文学博士)と、読み書き分離、読み方先習論に賛成する大野晋委員(学習院大学教授・文学博士)の二人の論文が掲載された。

読み書き並行の教育方式は、わが国の最初の文部大臣、森有礼がその方針を定めたものであり、以来百余年に亙りわが国語教育の基本とされて、全く批判されることなく今日に及んでゐるものである。然しながら、西尾論文を読むと、この論は実践から生れたものではなくて、単なる思ひつきに過ぎない論である事が解る。西尾論の一部をここに紹介したい。(原文は現代かなづかひ)

## 読み書き並行論(西尾実委員)

去る三月十日の国語審議会総会の席上、漢字学習の方法につき、これまで小学校低学年で学習させてゐたやうに、読み書き並行で学習させるよりも、読みだけ学習させることにすると、これまでよりもずっと早く、たくさん修得させることが出来るといふ事がら、漢字学習の方法を、読

みだけに限って、漢字を早く数多く修得させるやうな調査を行ふべきだといふ提案があった。

確かに、近年小学校の児童たちは、入学前に幼稚園や家庭で、文字をたくさん覚えて来る者が多くなってゐる。テレビなどで漢字のいくつかを覚えて来る者もある。勿論、ただ読むだけでも、漢字を多く覚えてゐるといふ事は結構である。然し、どういふ字をどれだけ覚えて来るかといふ事になると、個人差が著しく、修得量もまちまちである。小学校低学年における言葉の学習は、さういふ偶然的個人的な知識だけに満足し、それを推進するだけでは足りない。

漢字が読めるだけでなく、書くことも出来るといふやうな学習を基礎にしなくては、漢字の一字一字を確実に認識することも出来なければ、その漢字の機能を生かすことも出来ない。いはゆる形・音・義の統一体としての漢字を学習させるためには、面倒なやうでも読み書き並行の基礎的学習を経験させなくてはならない。

漢字の学習を読み書き並行に進めなくてはならないと言っても、それは小学校における入門期における学習の事で、入学以前に個人的偶然的に漢字を修得してはならないといふ事ではない。また、入門期の読み書き並行の基礎学習が終つた後には、当然読む学習だけで、読み書き並行学習によって得られるやうな形・音・義の統一体としての漢字が修得されることも認めなくてはならないし、むしろ、それを奨励し

なくてはならない事は言ふまでもない。このやうに漢字学習は、読みだけで修得される方法と、読み書き並行の学習とは、決して対立的でなく、むしろ共同的相互補正的方法であることを理解しなくてはならない。(石井注・これが今まで行はれてゐたら誠に結構な事である。然し、実際には「読み先習」の考へ方を全く認めてゐなかつたからこの議論が始まつたのである。そもそも「読み先習」は「読み書き並行」を全く否定するものではないのである。“山”や“川”などは読み書き並行でよいのである。然し、“鳥”や“獣”などは並行学習よりも読み先習の方が効率がよいから、「読み先習“も”認めなさい」といふ事なのである)

小学校における漢字学習が、読みによって促進される事と、これまでのやうな読み書き並行学習とは、当然、共同的に適当に学習され指導されなくてはならないが、国語学習において、特に漢字学習は大事であり、かつ、難しいために、漢字の学習をかなの学習から切離して、出来るだけ漢字数や漢語数を早く多く学習させて、漢字漢語のストックを多く持たせる事が学力であるといふやうに決め込んでしまふ事には疑問がある。(石井注・これこそ現行の読み書き並行の教育が陥つてゐる弊害であり、読み先習はそれを救ふために考へ出された方法なのである。次の“書取り”なども読み書き並行だから起る事なのであつて、読み先習ではさういふ必要が無い。全く見当違ひの批判といふより仕方が無い)

これまでも、漢字は書くことが難しいといふ立場から、書取りといふ学習法が盛んに行はれた。さうして、漢字漢語に関するストックを豊富にしようとした。勿論、さういふストックが豊富であることは貧弱に勝ること万々である。然し、さういふ書取り練習を行っても、案外、作文力に対する影響が少ない、といふ事も注目されて来た。

これは書く漢字の問題であるが、読む漢字漢語のストックにも、これに似た現象がありはしないかと考へられるが、どうであらうか。(ここに至って西尾氏は“読み先習”の言葉だけしか知らなくて、内容については全く無知であることが解る)(中略)

近年、小学校入学の児童に対し、教科書中のかな言葉を漢字に直して読ませる方法が行はれてゐるといふ。また、先生が話をしながら、実物の代りに漢語の文字板を提示し、読みによる漢字を修得させることが行はれてゐるといふ。

私はまだ見学してゐないから、かれこれ批判することは出来ないけれども、これは日本語を表記するための正書法が一定してゐれば、それは有力な方法に違ひない。が、現在のやうに、かなでも書き漢字でも書くといふやうな習慣になつてゐる場合には、漢字を知らなくてもかなでなら書けるといふ段階を経ないで漢字を教へることに急ぎ過ぎると、却てセンテンスにおける漢字使用の的確さが失はれることもありはしないかと思はれるが、どうであらうか。(以下略)

西尾氏の論文の主要な部分をここに紹介したが、お読み頂けば直に解るやうに、石井方式についての理解が全く無い。いや、理解が無いならまだ良い。大変な誤解といふか、自分勝手な想像で石井方式を決めてつけてゐる。然し、これは西尾氏に限った事ではない。石井方式に対する批判は全部この手のものである、と言っても決して言ひ過ぎではない。

石井方式でないものを石井式だと勝手に思ひ込んでそれで非難するのだから馬鹿馬鹿し過ぎて議論する気になれない。だから、西尾氏の論について一々言ふのを差し控へるが、終りのツメテンを付けた部分については一言して置くことにする。

この西尾氏の判断は全く逆である。「漢字使用の的確さが失はれる」のは、初め“かな書き”で教へるからであつて、最初から漢字で教へればさういふ心配が全く無い。だから、“がっこう”を“学校”と教へよ」と提案したのである。

私は、昭和三十一年から二年間、「かな書きの段階を経て漢字を教へる」といふ、文部省指導要領に則つた指導を行ひ、これを、二十八年から三年間実践した石井方式による指導の結果と比較してみても、漢字使用の的確さに余りにも違ひがあつたので、敢て文部省の方式を否定し、石井方式の採用を提案したのである。

その事については『私の漢字教室』(黎明書房刊)といふ書物によって、昭和三十六年に発表し、教育界でもかなりの評判になったものであるから、西尾氏ほどの地位に在ったら、一読あって然るべきだと思ふが、それが無かったやうである。然し、読んでみなくても、大新聞に論文として執筆するからには、批判する対象を理解してから筆を執る責任があるのではないか。

かういふ無責任極まる論文を書かれると、読者ばかりか、私にとっても甚だ迷惑である。西尾氏が考へてゐる石井方式が本当の石井方式だと思ひ込まれる恐れが多分にあるからである。「何だ。石井方式とはこんなものか」と思はれたら、石井方式を理解してもらふ道が切れてしまふ。然し、これは西尾氏に限らず、著名な学者にはよく見られる態度であるから御注意頂きたいと思ふ。

#### 読み先習論(大野晋委員)

#### 固定観念を打破れ 読む力こそ生活に必要

私は先づこの議論が「教育の方法」上の議論であることをお断りして置きたい。然し、この背後には「文字の役割」に関する一つの見方が控へてゐて、戦後の文字政策についての一つの批判が込められてゐる。また、これは空疎な観念論ではなく、実践の結果を基礎としてゐること

も最初に言って置きたい。

戦後の学生が、読み書きの能力において、著しく低い実力しか持つてゐないことは、既に繰返し言はれて来た。それは「定説」となつてゐる。その状態は大学生において総合的に示されてゐるが、その途中の小学校・中学校でも明確に見られる事実である。例へば、小・中学校の社会科、理科などの教科書が読めない結果、社会科、理科などの教師は、先づ教科書の読みのために多くの時間を費してゐる。

この状態をもたらした原因の一つには、漢字の学年配当たるものがある。小学一年生四六字、二年生一〇五字、三年生一八七字といふやうに、各学年で学習する漢字の数が限定され、それ以外の漢字を教科書に提出することは制限され、学習が拒否されてゐる。この漢字の配当表決定の基礎には、小学生の学習負担の軽減といふ歌ひ文句があり、学ぶ漢字はすべて書けなければならないといふ考へ方がある。そして、小学生の卒業時に、書取りで書ける字数は五百字程度であるといふ戦前からの調査結果が参考にされてゐる。

然し、文字の機能について、我々は考へ直さなければならない点がありはしないか。と言ふのは、言語生活で果す文字の機能は、書く面と読む面があり、文字は現代の社会生活では、むしろ読む物として大きな役割を担つてゐる。一日の言語生活を顧みる時、新聞を読み、雑誌を読む。殆どの人々が現在、それに三十分から一時間をかけてゐるだ

らう。

然し、書く時間けれどもどれほどあるかで見れば、職業的な文筆業者を除いた場合、個人個人は、手紙、日記、記録その他に、平均して読む時間の十分の一程度の時間しか費してゐない事に気付くであらう。ペンを持たない日のいかに多い事か。また、たとへ毎日ペンを執るとしても、それは、ある特定の事項に関する繰返しが多い。それに反して、読む文字の範囲はいかに広いことか。

戦後の国語教育は、読むこと、書くことだけが国語の教育ではないとして、話すこと、聞くことを大きな項目として取入れた。それはそれとして結構な事であると言へる。然し、書くこと読むことに関しては、書ける文字と読める文字とを、初めから一致させようとした。そして、漢字は難しい文字だとして、なるべく学ばせまいとして来た。だから、先づカナを教へ、後にそれを漢字に翻字する。然し、こゝには誤った固定観念の支配がある。それを実験的に明示したのが、石井勲氏による、いはゆる石井方式である。

石井方式は「社会で漢字で書く言葉は最初から漢字で与へよ。子供には、漢字を読むことはそんなに苦にはならないのだ」といふ立場に立つ。その事を、石井氏らは幼稚園児の教育で実践的に示したのである。井上文克氏以下の人々を中心とする大阪の幼稚園で、二万人近くの園児がこの教育に加はつてゐる。いたいけな三歳児たちが、先生の

示す木札に書かれた「電車」「飛行機」「自転車」「自動車」「汽船」といふ文字を一斉に“デンシャー”“ヒコーキー”“ジテンシャー”と読むのを見た人々は、己が目を疑ふであらう。

また、「九」と「鳥」と「鳩」のうち、園児が最も確実に早く読めるやうになるのは「鳩」といふ文字であり、「九」がこの中では最も読める率の低い文字である事を聞いて、人々は意外の感に打たれざるを得ないだらう。これらは、すべて実験の結果であり、一年保育の終りに、幼稚園児が読める字数は、四、五百字が標準となる事も明らかになってゐる。

この教育は、「漢字を詰込む」ために行はれたものではない。一日に五分位しか漢字での教育には使はれてゐない。こゝでは、「漢字を教へる」よりもむしろ「漢字で教へる」ことが目標である。

漢字かな交り文といふ表記の体系は、余り漢字を減らしては成立しないものだ。その体系には、それなりにある程度の漢字の数が必要なのだ。それを組合せて表記の体系を作り、また単語を造語して行くものなのである。だから、なるべく早く、ある程度の、恐らく数百字から千字程度の文字が読めるやうになる方が良い。それによって、社会科も理科も文章が読めるやうになる。そして内容の理解へ直ちに入つて行ける。

今は、小学校低学年から、社会科だの何だのと、各教科が時間を分取つて使つてゐる。然し、教科書の読みの段階で苦勞してゐる。そこで、社会科や理科は、小学校低学年の国語科へ、自分の持ち時間を貸し

てやる方がいい。子供が低学年で今よりも多くの読み時間を持ち、読みに力を注ぐなら、漢字が今よりずっと多く読めるやうになる。さうした上で、高学年で社会科、理科の持ち時間を返してもらへば、それぞれの学科は、早い豊かな理解と進歩を生徒に期待できるだらう。

大体、日本には、「漢文の素読」といふ学習の伝統があった。子供が漢字だけの文章を読むことを学習したのである。それによって文字を習得し、後にそれを書く段階へと進めて行った。戦後の漢字政策は、漢字を悪い文字と思ひ込ませ、なるべく学習させないやうにする事を目指してゐた。そして、漢字の学習が大きな負担だとして来た。然し、石井方式に基礎を置く「漢字の読み先習論」は、漢字学習に関する「読みと書取りの分離」を提唱し、豊富な識字の先行を求めるのである。

誤解を避けるために一言するが、これは決して漢字だけの教育を主張するものではない。話し方、聞き方の教育を否定するものでもない。漢字かな交り文を表記の正則とする限り、漢字の学習法は、常に基本から研究されるべきものである。「漢字の読み先習論」は、その一つの学習法として大きな意味を持つことを主張するに過ぎないものである。ただし、その背後には、戦後の文字政策の底にある考へ方に対して、批判的な思考を持ち、戦後の政策に対する単なる反対から脱却して、新しい有効な教育法を獲得しようとする一つの見解なのである。

以上が大野先生の論文である。今から二十年前に書かれたものであって、この二十年間には、読みと書きとの社会生活における比重は一層大きなものになって来てゐる。ワープロの著しい進歩と普及により、官庁や会社における文書は言ふまでもなく、個人的な手紙なども、今は文面だけでなく、表書きまで、活字で印刷するやうになり、漢字を手書きする機会はいよいよ減って来てゐる。極言すれば、「漢字は読めさへすれば、書けなくても済む」時代になったのである。「読み書き同時の並行学習」は、その意味でも考へ直すべき時代になってゐるのである。